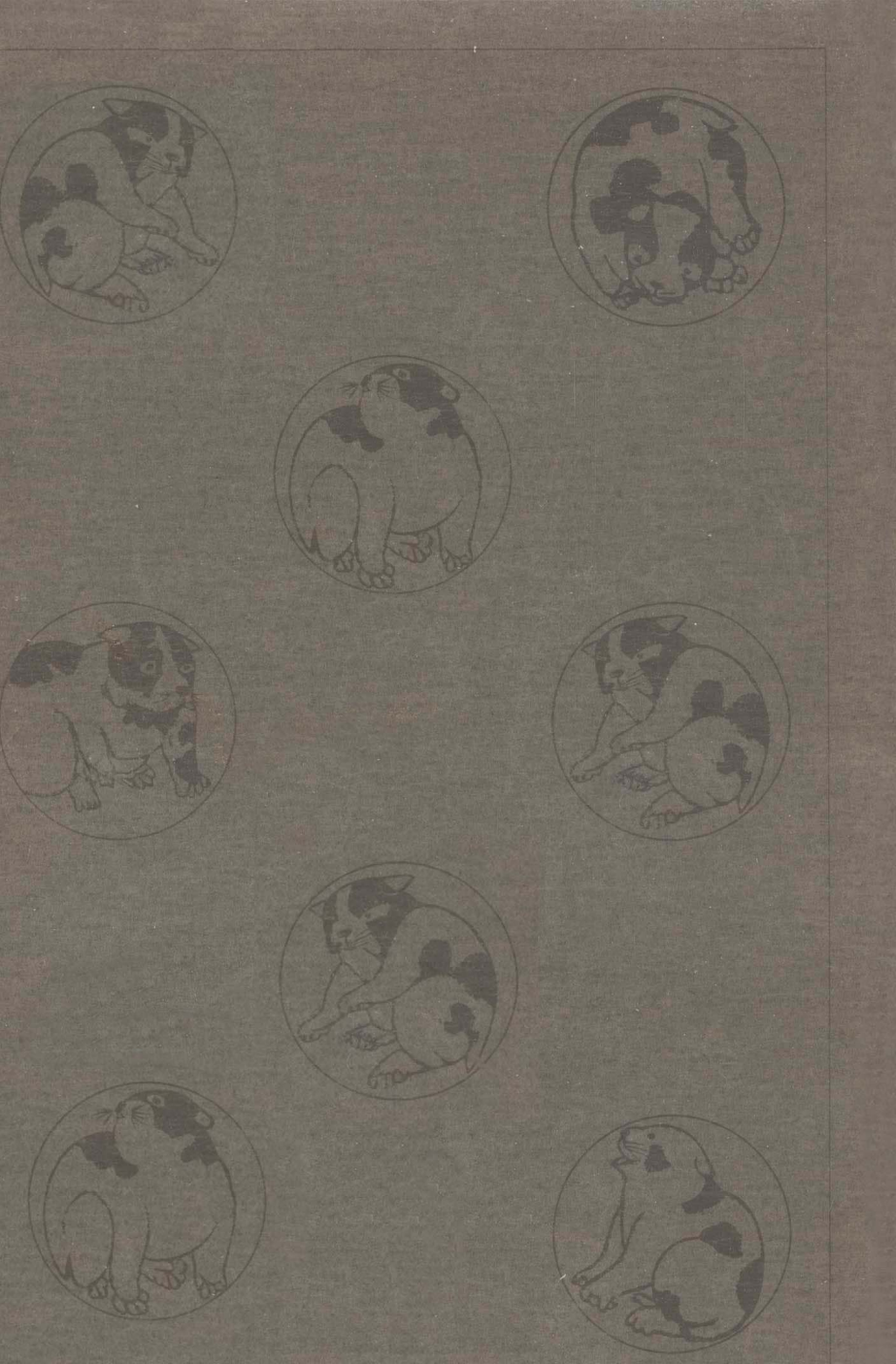

南総里見八犬伝

十

曲亭馬琴作
小池藤五郎校訂

岩波書店

南総里見八犬伝 (十) (全一〇冊)

一九八五年八月一五日 第一刷発行©

定価二六〇〇円

校訂者 小池藤五郎

発行者 緑川亨

発行所 〒101 東京都千代田区一ツ橋二-五-五
株式会社 岩波書店
電話 〇三(二六五)四一一一
振替 東京六-二六四〇

印刷・精興社 製本・文勇堂

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN 4-00-004320-X

解説

読本創作でモデル問題が起こることを恐れる馬琴は、人名の末にまで細かく神経をつかう。かの八犬士の一人の犬村大角のモデルは、勤王家蒲生君平らしく、『蒲の花かたみ』(馬琴の随筆。『兎園小説』の末尾)に君平の人となりをくわしく書き、さらに、墓表の大きさ、碑文の字数までも記してある。

家庭的に悲しい運命に弄ばれた馬琴には、強力邪悪の者への反抗心、微賤で不幸な者への同情心が深い。また約束厳守の気持が強く、金に細かく計数は正確であった。彼の青年時代の生き方は、明治維新前後に活躍した志士に類し、八犬士のそれも、彼の青年時代の姿に近い。馬琴作の読本の内容は、君父の仇は倶に天を戴かずの、江戸草紙中の黄表紙・合巻の敵討物の大流行と合流した。この思想は若い志士を強く刺戟し、結果的には、尊王教育と王道政治概説の、一番庶民的のテキストとなった。読本・黄表紙・合巻のこうした偉勲に、学界では気付かない。

馬琴の兄や妹から家族、渡辺崋山・蒲生君平らの友人・知人が、特に『八犬伝』の人物のモデルらしく、彼の不幸な妹は、浜路のモデルであろう。『松染情史秋七草』(馬琴作。歌川豊国画。文化五年刊。読本)のお染こと実は南朝の忠臣和田正武の女の秋野姫、久松こと実は楠正元の子の操

丸、『三七全伝南柯夢』(馬琴作。葛飾北斎画。文化五年刊。読本)の三勝・半七などの市井の恋愛心中物に、武士社会の義烈貞節の衣を着せ替える妙技があり、着せ替えを換骨奪胎ともよび、魁蕾(傀儡)子の号は、読本創作を、胸にぶらさげた箱から人形を取り出してあやつる江戸時代の大道芸人に、なぞらえての命名と言える。

里見家の政治は「仁」で一貫する。管領が私の怨で諸侯をつらねて、攻撃して来たゆえ、戦ったまでで、戦勝で占領した諸城は、すべて旧主に返した。常に敵を愛し、小恩にも必ず報い、礼を尽して敵将を待遇し、義理人情をこめた。それゆえ里見の仁政を慕って他領の民が集まり、占領した土地の民は、旧主の政治下にもどることを願わない。馬琴はこれを、天朝の政治に秘かになぞらえた。一方、天朝の尊厳を「掛向は最も畏き天朝」と呼び、「大君」「王」をさけて「皇」とし、「朝恩」「武恩」を区別し、前者は天地の恵に等しい「天威」、後者は人為的の「武徳」とする。天朝は民が主体、将軍は自家が目的と考える。この態度・考え方は、読本作者中、稀れである。

従来『八犬伝』は、『忠義水滸伝』により、作中の人物は、儒教倫理の擬人化と見られた。ところが、この超大編の中心に、法華経景仰の仏教思想があることを私は発見した。八犬士の主君里見義実の、安房国での旗あげは、小湊の誕生寺のとなりの竹藪に放火し、火焔を見て集まる村人で一隊を編成することから始まる。『八犬伝』の結尾では、造立した持国・広目・毘沙門・増

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

長の須弥の四天王の眼玉に、八犬士所持の霊玉合計八箇を使用し、この四天王を安房国の四方に埋めた。東方(孝と仁の玉)は犬塚・犬江、西方(義と信の玉)は犬川・犬飼、南方(礼と悌の玉)は犬村・犬田、北方(智と忠の玉)は犬阪・犬山がそれぞれに仏像を埋め、平安京の将軍塚になぞらえる。これが日蓮聖人筆の曼荼羅と全く同様である。しかも安房第一の霊場の鋸山には、別に伏姫の数珠玉百個を眼とした二十五の古仏、二十五の菩薩を埋めて仏種を植えた。『八犬伝』の根幹と言える伏姫は、法華経の信者で、読誦・書写を続け、法華経を身から離さない。以上の点と、日蓮聖人真筆曼荼羅百十六軸を併せ考えると、『八犬伝』の基礎は曼荼羅形式で、署名・花押から上方へ向かっての発展で、法華経八巻が、八房・八犬士・曼荼羅の四天王・二十五菩薩、伏姫の「人」と「犬」の結合まで、馬琴独得の理づめのプロットである。馬琴の宗旨は浄土宗で、別に法華経を信仰していたとみられる。

江戸時代の作者中で第一の博学、しかも総てが独学であった。従って自信が強く、確かに衒学的の記述が多いが、時代の小説作法の勧善懲悪に伴う教育的態度の行き過ぎと見られる。

馬琴の作品には、善悪が截然とし、私が「善悪三段法」と昭和元年頃から呼ぶ手法を多く用いる。善行・悪行ともに、三回重ねて一連とし、これを巧みに組み合せて描く。例えば小文吾が阿佐谷村で、悪漢鷗尻の並四郎と妻の船虫に出会った際、(一)並四郎が猪に掛けられて気絶したを救い、(二)猪を殺して村民の被害を除き、(三)猪を並四郎に与え、村からの褒美金その他で儲けさせた。

以上三段の善行に対し、悪漢・毒婦は、㈠恩人小文吾を殺そうとし、㈡盗賊の名を着せて死地に追い込んだ。㈢計画は失敗し、村人と畑上眼代を犠牲に、二人は逃げ去るという三段の悪事で報いる。さらに小文吾は、㈠並四郎の罪を宥して訴えず、㈡毒婦が贈った名笛を受け取らぬ寡欲、㈢恩を仇で返した並四郎に香奠を供えた、の三善事が綯交ぜてある。これが馬琴愛用の「善悪三段法」だ。

第九輯巻之七に「稗史作法」即ち馬琴の小説作法を載せる。主客・伏線・襯染・照応・反対・省筆・隠微の七法則で、李笠その他、元・明の戯曲・稗史作法から案じ、『八犬伝』中の事件を例に説明してあり、日本小説史上未曾有のものである。この「稗史作法」を基礎とし、坪内逍遥は外国雑誌の文学評論を取り合せ、『小説神髄』を書いた。彼は「稗史作法」を非難して好評を博し、日本の新文学の明治の出発点を作った。逍遥は少年の日から、馬琴の作品に親しみ、その基礎には馬琴が横たわる。小説の種類を、勧懲・摸写に二大別し、前者を否定し、「性格解剖」を提唱した。

本居宣長は物語の本質を「物のあわれ」とし、漢意・仏意を嫌い、馬琴とは反対の立場である。両者の最盛期が一致し、文学論を戦わせたら、宣長に勝味はなく、精悍な馬琴は和漢の諸資料を積み上げ、宣長を粉砕したであろう。宣長の説は、偶然だが逍遥の主張に近い。殿村篠斎(佐五平。安守)は宣長の門人、宣長歿後春庭を輔佐した。「稗史作法」を渇仰し、馬琴の親友で後援者

だった。

明治合巻（明治元年から二十年代まで出版の開明小説）の文芸性の欠乏と、馬琴の作品への郷愁で、その読本が多く読まれた。明治十五年東京共益社出版『俊寛僧都嶋物語』（馬琴作。豊国画。文化五年出版の物による）の如く、清朝活字、原本以上の美麗な絵の翻刻本が現われ、上海・釜山浦の書店まで百五十三売捌所を設けた。

馬琴が意匠し、実現を望む大衆小説としての読本の形態は中本形――の新説を提唱する。これは『高尾船字文』（馬琴作。長喜画。寛政八年刊。読本）に始まり、馬琴は安価と中本形を大衆読物の第一条件とした。明治の文明開化が選んだ大衆小説の形、即ち明治合巻はその真似で、約百年前の馬琴の意匠だ。

馬琴の肖像は十系統に分類できる。頑健・長大な体で青年期は肥満し、相撲取を勧誘され、逞しい筋肉質は壮年頃の様、『回外剰筆』の肖像は第八系統である。昭和四十五年京都に「董玉藤原中行筆」の肖像が現われた。昭和八年博物館の入田整三鑑査官蔵の物らしく、次の賛があった。

くちもせぬ　身さへとしさへ　たとふれば　あたしや名のみ　高砂の松（古稀自祝題詠）

凡例

一、校訂には『南総里見八犬伝』の初版本を用い、校正は毎回原本に拠って厳重に行った。

一、読みやすくするために、左の諸点に特色を持たせたほかは、全く原本通りにして置いた。

(1) 本文に段落を設け、詞には鉤(「)を施し、仮名の濁点・半濁点は適宜に補った。

(2) 冒頭の漢文の序の繋符(—)を除き、目録は仮名交りに改めて本文中の回号に一致させた。

(3) 本文中に和歌・詩文・その他が挿まれている場合には、それを抜出して別行とした。

(4) 原本の文章はすべて句点(。)で切ってあるが、それを読点(、)・句点(。)に分けて用いた。名詞を重ねた場合で、原文に句点がない時だけ、並列点(・)を附けて置いた。

(5) 原本中の文字・仮名づかいの甚だしい誤謬——例えば「城平等」を「城兵等」に、「聡察叡智」の「そうさつはいち」を「そうさつえいち」に訂正——は訂正して置いた。

(6) 原本の仮名づかいは「亡父」・「滅亡」、「亀篠」・「亀篠」等の如くに、同一の文字についてもしばしば不統一である。かかる点は、むしろ時代の仮名づかいと、作者自身の特徴とを知る上から、原本通りにした。ただし「人物一覧」には多く用いられている方を振って置いた。

（7）馬琴の特色ある文字使用法を保存するために、極力原本通りの漢字を用いた。ただし「也」・「歟」その他を仮名書にした。「漁夫」の如き場合には左側の片仮名のみを削った。

〔編集付記〕

旧岩波文庫版『南総里見八犬伝』全十巻（小池藤五郎校訂、昭和十二～十六年刊）を改版するにあたって左の改変をくわえた。

一、旧岩波文庫版を底本とし、国立国会図書館蔵の初版本『南総里見八犬伝』（架蔵番号別三―一〇六―二）と対校して誤植などを訂した。

一、右国会図書館本により、旧岩波文庫版で省かれていた挿絵を余すところなく補った。

一、漢字は新字体を用いたが、仮名づかいは初版本どおりとした。

一、底本で使われている異体字のうち、逃・羣・腰・胸・晝・胃など、いくつかを通行の漢字に改めた。

一、読みやすさの便をはかって振り仮名の一部を省略したが、人名・地名などの固有名詞はこの限りではない。

一、底本の（　）は原本の割注を示しているが、今回これを〔　〕に改めた。原本の欄外注は［　］に収めた。

一、各輯の総目録は訓み下し文に改めたが、本文中の回号との異同は初版本のままとした。

（岩波文庫編集部）

話の筋（第十巻の分）

主従僅かに二騎となった定正は、小湊目堅宗に囲まれた。彼は命を助かりたさに、自己の首級の代りに髻を切って敵に渡し、大石憲儀は定正に代って捕虜となった。

大茂林浜に泳ぎついた音音は、五十子の城にまぎれ込み、人質の妙真・曳手・単節らと共に、定正の継母と朝寧の夫人の自害をとめた。毛野は五十子の城を、道節は忍岡の城を占拠した。

かくて海陸の大激戦は里見方の大勝利となり、定正は武蔵国河鯉の城に、顕定は上野国沼田の城に遁れて、僅かに余喘を保っていた。義成は、将士を稲村の城に集めてその功を賞し、敵味方の菩提を弔う大施餓鬼を行い、戦禍を蒙った窮民を賑わした。捕虜となった十二人の武将も大施餓鬼に参列し、賢者を嫉んで企てた無名の軍に加わったことを後悔し、大法師の数珠の緒が切れて珠が虚空に燦然と飛び散る不可思議さに傲慢心も青ざめるのであった。また、八犬士の苦衷を彼らが聞いた時、英傑を見る明のなかったこと、苛酷の取り扱いをしたことなどに、強い良心の呵責があった。

さきに親兵衛を迎えに京都に向かった蜑崎照文らは、伊勢国阿漕が浦で抑留され、遅れて京都に着いた。照文は両管領家の非道を禁裏・柳営に訴えた。愁訴は聴かれ、和睦の勅使として秋篠

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

広当に、室町殿より熊谷直親を添えて東下せしめられた。両管領が連署の誓文を出して和睦を願ったので、里見家では占領の城と捕虜の十二武将をかえした。義成は正四位上に、八犬士は従六位下に、また、信乃は信濃介、現八は兵衛権佐の如く、八犬士にはそれぞれ任官の恩命が下った。

成氏が釈されて許我へ帰る時、信乃は送って行って国府台の城に宿り、驟雨の夕辺に、父番作の遺訓に従い、しきりに辞退する成氏に村雨丸を献じ、左の歌を詠じて、忠孝の大義を全うした。

今ぞほす身のぬれ衣はむら雨に親の遺せし言の葉の露

文明十六年六月一日、定正・顕定らは相模の三浦の浜に、義成は安房の洲崎の浦に出て、互いに早船で誓書の献酬を行い、和睦の儀が滞りなく済んだ。御礼のために、八犬士たちは勅使を送って上洛した。八犬士は昇殿を許され、丶大は大禅師号を賜った。帰郷の途中、金蓮寺で春王・安王および信乃の祖父の大塚匠作の法要を営み、さらに拈華庵で信乃の外祖父井直秀の菩提を弔った。

八犬士はみな一城の主となり、所領一万貫文を賜った。珠簾の奥には静峯姫・城之戸姫以下の義成の八人の姫君が手に手に紅の紐の端を持って坐り、簾を隔てて八犬士がその紐の先を籤引にして把り、互いに引きつ引かれつして、それぞれに妻として賜った。信乃は可憐の浜路そのままの浜路姫を、大角は恋妻雛衣の名に似た鄙木姫を室とするなど、悲しくもまた嬉しい思い出であ

った。

、大法師は八犬士召集、里見家再興の宿願が完成したので、ひたすら俗世を厭い、自作の須弥の四天神王の眼に八犬士所持の霊玉を鏤め、義成に請うてこれを国土の四隅に埋め、里見家の守護神とした。延命寺を念戌に譲り、富山の伏姫の岩窟に隠れて、全く俗界から離れてしまった。

歳月は流れた。義成は歿し、八犬士は富山に隠棲し、遂に仙術を得た。その倅の八犬士たちは里見家に仕えていたが、或る時富山に登り、父の八犬士たちに諭され、里見実尭(第四世)の時に悉く仕えを辞した。孫の八犬士たちは、里見義尭(第五世)の世に召出されて仕えた。

(大尾)

主要人物一覧（第十巻の分）

○犬塚信乃・犬川荘介・犬飼現八・犬山道節・犬田小文吾・犬阪毛野・犬村大角・犬江親兵衛

八犬士。

里見義実　義成　義通　実尭　義豊　義尭　義弘　義実は里見家創業の英主。義成はその子。義通は孫。実尭は義通の弟で兄の家督を継ぐ。後に兄の子義豊と争い、実尭は討死し義豊も討たれた。その後を義尭・義弘と嗣いで立った。

小湊目堅宗　犬阪毛野の軍に属する隊長。鮠内葉四郎・猨岡猿八らと共に、矢口の河原で扇谷定正を捕えた。

浮屠家海苔七　武蔵国大茂林の浜辺の漁夫。仁田山晋六の船を焼撃した里見方の間諜の音音を救った。

箕田（猯田）馭蘭二　韮見利金太　いずれも定正の臣。箕田は五十子の城の頭人、韮見は防禦の頭人。

反橋雑記　丁田畔四郎　共に大塚の城主大石憲儀の臣。定正が敗軍の由を聞いて逃げ去り、道節の軍に破られた。

誼夾院豪荆　突面坊豪的　師椀坊豪菁　誼夾院は落鮎有種の親戚で、下総の誼夾院村の修験者。突面坊・師椀坊はその弟子。有種を助けて忍岡の城を陥れた。

滸我（許我）成氏　山内憲房　扇谷朝良　扇谷朝寧　千葉介自胤　長尾為景　三浦義同　三

浦義武　大石憲重　原胤久　斎藤盛実　稲戸由充（由光）　里見方に捕虜となった両管領方の十二人の将。

網曳平大夫周魚　伊勢国司北畠家の臣。阿漕の浦の陣代として、蜑崎照文らの船を救い、これを抑留した。

熊谷二郎左衛門尉直親　将軍義尚の臣。扇谷・山内両管領と里見家を和睦させるための勅使秋篠広当に従って、関東に下って来た。

望見一郎　科革七郎　下河辺二郎行正　間中（真中）大内蔵直充　共に成氏の臣。成氏を迎えに安房に来た。

息部局平　信濃国小篠村の百姓。信乃の祖父大塚匠作の夢の告により、春王・安王・大塚匠作の髑髏を、美濃の金蓮寺に持参し、信乃に面会してその供養をさせた。

宇賀地野見六　美濃国垂井の石工。信乃の祖父大塚匠作の亡霊の依頼で、春王・安王などの墓石を刻んだ。

真利谷柳丸　葛羅媛　柳丸は上総椎津の城主。葛羅媛はその姉。媛は大田木の城主政木大全の妻となった。

浜路姫　城之戸姫　栞姫　竹野姫　弟姫　小波姫　鄙木姫　静峯姫　いずれも里見義成の女。信乃・荘介・現八・道節・小文吾・毛野・大角・親兵衛（順序通り）のそれぞれの妻となった。静峯姫のみは親兵衛に先立って歿したが、他の七人の姫は八犬士が富山に隠棲後、子供の成長を楽しみつつ、次第に歿した。

犬塚信乃戌子　犬川額蔵則任　犬飼玄吉言人　犬山道一郎中心　犬田小文吾理順　犬阪毛野胤才　犬村角太郎儀正　犬江真平如心　八犬士の子。いずれも父の後を継いで里見実尭に仕え、大兵頭として五千貫文の知行を受けた。後に富山に登って父の八犬士に面会し、その論告によって仕えを止めて他郷に移り住んだ。義尭の世に召し出されたが仕えず、その子ら――孫の八犬士――が義尭・義弘二世に仕えた。

目　次

解　説
凡例・編集付記
話の筋（第十巻の分）
主要人物一覧（第十巻の分）

南総里見八犬伝（十）

八犬伝第九輯巻之四十六簡端附言
南総里見八犬伝第九輯下帙下編之下総目録

第九輯巻之四十六

第百七十七回　一顆の智玉途に一騎の驕将を懲す　四個の保質反て両個の保質を捉る　建柴の道場に毛野守如の墓に謁す　湯嶋の茂林に道節三隊敵を破る　……九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com